

貴重書紹介

小城鍋島文庫『新編水滸画伝』



図1 巻一冒頭



図2 前帙(巻五)刊記

解説

三国志演義、西遊記、金瓶梅と共に中国小説の四大奇書に加えられる水滸伝は、遅くとも17世紀前半には日本に伝来していた。当初は主に漢学・唐話に習熟した人々の間で読まれていたようだが、やがて庶民の娯楽的な読み物として享受されるようになる。その受容を支えたのは、中国で成立した「原書」はもちろん、それらをもとに日本で刷られた「和刻本」や、書き下し文のごとく翻訳された「通俗物」、さらには「翻案」されるなどして流通した水滸伝関連書であった。今

回紹介する『新編水滸画伝』もまた、我が国における水滸伝の受容を支えた作品の一つである。

『新編水滸画伝』は全九編からなる長編読本である。なお、「読本」とは絵を主体とした「絵本」に対し、読むことに重きをおいた文字を中心とする近世小説のことである(図1)。曲亭馬琴が初編を著し、二編以降を高井蘭山が継いだ。葛飾北斎が全編の挿絵を描いたことでも知られている。

成立の発端は、書肆の前川弥兵衛と角丸屋甚助が馬琴を訪い、かの鳥山石燕が著した『水滸画潜覧』(安永6年<1777>刊)のような絵入りの、それでいてより詳しい水滸伝の訳文を依頼したことによる。この申し出に対して馬琴は「嘗、水滸伝を讀に食を忘れて厭ことなく、灯を秉て倦ときなし」(序巻「訳水滸弁」として、積極的に執筆に取り掛かり、文化2年(1805)に、まずは初編の前帙(序巻および巻一～五)が刊行され、次いで文化4年に後帙(巻六～十)が上梓された。

この後、馬琴は角丸屋甚助による訴訟沙汰に巻き込まれたことをきっかけに続編の執筆を辞し、やがて蘭山が嗣編することとなる。そうして数々の書肆の手を経て、初編前帙刊行の33年後に全九編が出来た。近代に至ると、様々な活字本が刊行され、より多くの読者の手に渡って読み継がれた。

小城鍋島文庫には、馬琴が著した初編の前帙6冊と後帙5冊の計11冊が蔵される。各帙の刊記には馬琴へ執筆を依頼した前川弥兵衛と角丸屋甚助の名が記されることから、現存する『新編水滸画伝』諸本の中でも、早い時期に刷られたものの一つということがわかる(図2)。

なお、図3は楊樹の上に鴉が巣を作り、それが哇々と騒がしいことを厭うて、宴の最中に魯智深がその大木を引き抜き、自身の怪力を示す場面である(巻八)。

(地域学歴史文化研究センター 村上義明)



図3 魯智深、菜園に綠楊樹を抜く

参考文献

- 高島俊男 著
『水滸伝と日本人 江戸から昭和まで』
(大修館書店、平成3年)
- 徳田武 校注
岩波文庫『近世物之本江戸作者部類』
(岩波書店、平成26年)

引用に際して適宜通行の字体に改め、句読点を付した。